

**労働の疎外**——資本主義的生産は、自分の創造物が自分を搾取する価値として自らをますます資本にしばりつける。

「われわれが第四章で見たように、貨幣を資本に転化させるためには、商品生産（第四版では、価値生産、となっている。）と商品流通とが存在するだけでは足りなかった。まず第一に、一方には価値または貨幣の所持者、他方には価値を創造する実体の所持者が、一方には生産手段とが、互いに買い手と売り手として相対していなければならなかった。つまり、労働生産物と労働そのものとの分離、客体的な労働条件と主体的な労働力との分離が、資本主義的生産過程の事実に与えられた基礎であり出発点だったのである。

ところが、はじめはただ出発点でしかなかったものが、過程の単なる連続、単純再生産によって、資本主義的生産の特有な結果として絶えず繰り返し生産されて永久化されるのである。一方では生産過程は絶えず素材的富を資本に転化させ、資本家のための価値増殖手段と享楽手段とに転化させる。他方ではこの過程から絶えず労働者が、そこにはいつかと同じ姿で——富の人的源泉ではあるがこの富を自分のために実現するあらゆる手段を失っている姿で——出てくる。彼がこの過程にはいる前に、彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のものとされ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかで絶えず他人の生産物に対象化されるのである。生産過程は同時に資本家が労働力を消費する過程でもあるのだから、労働者の生産物は、絶えず商品に転化するだけでなく、資本に、すなわち価値を創造する力を搾取する価値に、人身を買う生活手段に、生産者を使用する生産手段に、転化するのである。」（資本論（大月版）第一巻 第7篇 資本の蓄積過程 第21章 単純再生産 P742~743）

#### **コメント**

資本主義的生産は、生産手段の所持者と労働力だけの所持者との存在を基礎とする。労働者は労働力を売ることにより、その生産物は資本家のものとなり、その労働は彼から疎外され、自分の創造物が自分を搾取する価値として自らをますます資本にしばりつける。